

Barbara Harriss-White,

India Working: Essays on Society and Economy.

Cambridge: Cambridge University Press, 2003,
xix + 316pp.

つじ た ゆう こ
辻 田 祐 子

本書の著者オックスフォード大学バーバラ・ハリス・ホワイト教授は、イギリスにおけるインド研究を主導してきた人物であり、農村研究を中心とする数多くの著作で知られる。近年の主要な編著書には、インドの西ベンガル州とバングラデシュの農業と農村 [Rogaly, Harriss-White and Bose 1999], タミル・ナードゥ州の農村の変容 [Harriss-White and Janakaraman 2004], 社会セクター [Harriss-White and Subramanian 1999], グローバリゼーション [Harriss-White 2002] などがある。

著者の研究の最大の特徴は、自ら「フィールド経済学」と呼ぶその調査手法にある。多くのインド人経済学者は自らフィールド調査を行わない。対照的に、著者は30年以上にわたって自分の調査村とその周辺地域でのインド人の日常生活をつぶさに観察している。本書では、それらを体系的に説明しつつ経済学以外のディシプリンも含めて既存の理論的枠組みの限界を指摘し、自らの見解、仮説を提示するというスタイルが貫かれている。

1991年のセンサスによるとインドでは大都市以外の地域に国民の88パーセントが暮らす。本書の目的は、こうした地域における経済（蓄積と分配）著者曰く「インド経済の88パーセント」が社会的蓄積構造（social structure of accumulation）によって規定されていることを明らかにすることであ

る。とくに、国家や法などの制度以外にジェンダー、宗教、カースト、空間といった既存の研究では注目されなかった社会的制度などにも注目しつつ、さらにそれらの相互に密接な関係を分析しているところに本書の特徴がみられる。著者は、「インド経済の88パーセント」が社会文化的な規制を強く受けながら機能していることを丁寧に解明し、そうした非市場制度は、規制緩和や地方分権化でも解体できないことを示して、経済自由化や開発政策のあり方に警鐘を鳴らしている。

本書は、膨大な農村フィールド調査を随所に織り交ぜながら議論されていることから、著者のインド農村研究の総括とも位置づけられよう。

本書の構成は以下のとおりである。

- 第1章 はじめに インド経済の特徴
- 第2章 労働者とその社会構造
- 第3章 インドの開発と中間階級
- 第4章 地方行政とインフォーマル経済
- 第5章 ジェンダー、ファミリービジネス、ビジネスファミリー
- 第6章 多宗教性とその経済へのインプリケーション
- 第7章 カーストと企業資本主義
- 第8章 空間とシナジー
- 第9章 インドはどのように機能しているか
- 第10章 追記 ファシスト政治と経済

以下、順を追って内容を要約する。

第1章では、本書の目的、分析対象、分析方法、理論的枠組みについて述べられている。

第2章では、インドの雇用、労働市場の実態を労働・土地関係、債務労働、児童労働、労働移動、ジェンダー、カースト、インフォーマル・セクター、フォーマル・セクター、労働組合などの幅広い視点から分析し、社会的な構造により労働・雇用市場が規制されていることを示している。さらに経済自由化により社会階層間の雇用をめぐる闘争が激化し、

グローバリゼーションでインドが売り物としている労働者の低賃金は労働組合をはじめとする労働者の組織的運動の弱体化、労働者の分断化を進めたという。一方で、「88パーセントの経済」における労働者はグローバルな競争に曝されている財・サービスの生産者にさえもなっていないと締め括っている。

第3章は、経済自由化後も小都市・農村経済は引き続き小規模資産家、農業関連・農業ビジネスエリート、地方公務員のゆるやかな連携である中間階級（intermediate class）に支配されていることを実証している。中間階級は、例えば税制改革の中身よりも脱税の方法に注意を払うなど、政策決定過程よりも政策の運用に影響を及ぼして骨抜き政策にすることを重視するという重要な指摘がされている。

第4章は、国家の役割、とくに地方行政（local state）の蓄積における役割を論じている。既存の地方行政の研究では法や秩序に注目しているのに対し、本章では末端行政の日々の業務における慣習や行政官の私的地位（ジェンダー、カースト、出身地など）に注目しているところに特徴がみられる。さらに、インド人の88パーセントが住む地域では巨大なインフォーマル・セクターが存在し経済のほとんどが国家の直接規制の対象外にあるというデータから明らかな点以外に、国家と中間階級、公式な国家と影の国家、公式の行政の役割と行政官のアイデンティティー、国家と市場、国家と社会の境界線が曖昧であるという重要な指摘がなされる。

著者によれば、世界銀行などの援助機関では国家の最大の問題を汚職と捉えているため、レント・シーキングを防止するための規制緩和が政策提言される。しかし、それは汚職を撲滅できないだけではない。規制緩和や行政改革による公務員削減で行政の人的・物的資源はますます不足して弱体化し、中間階級の一部である末端行政官の裁量の余地を大きくする。その結果、資源分配は開発政策を反映するのではなく地域の権力構造を反映して、さらなる地元の中間階級の蓄積を促すというメカニズムが多く具体例とともに説明される。すなわち国家により提供される財・サービスの質は規制緩和、行政改革などで低下し、インフォーマル経済や闇経済を助長

し、末端の住民における不平等を助長する結果となっているという。以上を踏まえたくて著者は、中間階級を中心に広く浸透している脱税こそがインド経済の最大の問題であると主張する。

第5章は、経済における女性の地位だけでなく、資本がコントロールされるメカニズムに焦点を当ててジェンダー関係を議論している。インドの88パーセントにおける経済活動はファミリービジネスを基盤としており、そこでは資本主義よりも家父長制の方が強い影響を与えているからである。家父長制は企業間の競争を下げ、企業による税金を最小化し、さらにビジネスファミリーが経営する労働集約産業においては技術革新も起こりにくいため中間階級の資本蓄積は最大化される。こうした一連の仕組みがいかに女性の生存に対して負の影響を与えているかが解明されている。近年、女性の労働力率や資産保有が増加する一方で、女性人口は低下し、女児死亡率も増加するというパラドックスを明らかにした章である。

第6章は、多様な宗教の存在が経済に及ぼす影響を論じている。市場経済のなかでも宗教は国家、階級を補完する制度として機能しており、経済に溶解するのではなくむしろ強化されているという。そして経済活動において宗教グループと同様の機能を発揮できる集団はなく、宗教間の経済活動における競争は、コミューナル対立の火種にもなりうると著者は指摘する。各宗教内のサブ・カーストやサブ・セクトごとの分業が進みつつあるのも事実だが、貿易には各宗教のほんの一部しか参入できず、それらの一部の蓄積は守られている。自由化は宗教間の競争を激化させ、各宗教による団結の動きを加速化させたという。

第7章では、前章の宗教に関する分析を発展させ、近年の政治において重要性を増しているカーストと経済について分析している。カーストは、社会統制や個人の社会的地位の決定においては重要ではないとの仮説を検証し、契約が慣習にとって代わると想定される自由化後の市場経済においても、カーストが選択的に規制機関として再機能していることが示される。例えば、カーストを基盤とする産業団体は

地方経済の組織化、規制において最も重要な役割を果たしているという。カーストのイデオロギーはカースト制度、家父長制などを強化しつつ中間層の経済利益を利するように機能していると実証されている。

第8章では、前章まで論じてきた蓄積構造には空間的なパターンがみられることから、インドの開発における特徴である産業クラスターについて議論している。インドのクラスターは一般的に生産品目、労働・雇用の規制方法、限定的な競争、蓄積の現地化、大規模な環境破壊に対する社会的容認の5つの特徴がみられる。それらは、後背地における資産所有や農村構造、カースト構造、地方行政を反映して歴史岐路依存的に形成されたものであるという。著者はクラスター開発による農村小都市経済へのインプリケーションを示唆して、インド政府の進める同政策に懐疑的な見解を示している。

第9章では、本書を総括して1991年以降の構造調整／経済改革についての考察を行っている。経済自由化は、市場と非市場制度 前者は後者なしに機能しない 間の緊張関係を強化した。換言すれば、自由化は市場が埋め込まれているジェンダー関係、宗教、カーストなどの社会的蓄積構造を経済的制度として再生、永続させたのである。したがって、経済活動を規制してきた各種の法律・規制を撤廃することは、すでに法律を執行していない者に対する国家の降伏であり、土地の有力者が法律を超える存在である実態経済の現状を助長するだけである。こうして、「インド経済の88パーセント」では中間階級における蓄積が続くだろうと著者は述べている。他方で、労働者はインフォーマル・セクターや地下経済の拡大、雇用の非正規化により生活の糧を得る手段が不安定になって自由化のしわ寄せを被った。経済自由化は、社会的蓄積構造あるいは説明責任の「調整」や、所得収斂による地域間格差の縮小を想定している。しかし、実際には自由化が歴史岐路依存的な社会蓄積構造を破壊したわけではなく、さらに今後も地域内外の所得格差の拡大が進むことが前章までの議論から示唆されている。

著者は、以上のような自由化の分析を次のように

まとめている。政策とはその策定プロセスでのレントを求める闘争で政治的資源が配分される方法の結果である。経済自由化はこうしたレントを破壊するのではなくその闘争を強化したにすぎない。すなわち「真の構造調整」には、反汚職や納税に対する強い義務感、説明責任を持つ文化を必要とし、そのためには民主的な意志決定のための政治・制度を持つ開発政策が必要であるという。

第10章は追加的に執筆された章で、1990年代後半以降にインド人民党が中央政権を握ってからのヒンドゥー至上主義（Hindutva）の高揚と88パーセントの経済との関係が分析されている。インドの88パーセントの経済では過去にヨーロッパのファシスト国家でみられた特徴はみられない。しかし、その兆しは政治と経済の両方において芽生えつつあるという。

本書は社会科学全般の幅広い知識を必要とするため、初学者にとっては決して易しい書ではない。評者としても本書のエッセンスが的確に伝わったか不安を残しつつ、本書の意義を2つ挙げておきたい。

第1に、インドの農村・小都市経済分析において地方行政、中間階級、ジェンダー、宗教、カースト、空間を静的に捉えつつ、これまでの研究が体系的に説明しえなかった農村・小都市の経済社会の全体像を描くという大胆な試みに成功していることである。Toye（1993）は、インドの政治経済分析における枠組みを「レント・シーキング・モデル」、「農村都市分裂モデル」、「支配的資産階級モデル」の3つに分類し、とりわけ第3の「支配的資産階級モデル」に高い評価を与えた。同モデルの代表論者であるBardhan（1984）の分析において、本書の「インド経済の88パーセント」に当たる人々はどう扱われているだろうか。彼らは、大企業資本化階級、富農階級、官僚というそれぞれ個別にレントを追求する支配的有産階級の下位に位置し、支配的資産階級の利益のために奉仕するだけの存在でしかない。一方、本書は「レント・シーキング・モデル」をより発展、洗練させた形で示したと考えられる。著者は同モデ

ルの中間階級に注目する代表論者の長短を指摘しつつ、自らの理論を発展させ、既存の研究では制度として分析されなかったジェンダー、宗教、カースト、空間にまで踏み込んでいる。それは、Bardhanに批判的な金子・佐藤（1998a；1998b）の国家と社会を媒介する中間組織を中心とする社会階層に注目した分析とも一線を画すアプローチである。もちろん、本書はインド経済全体を扱ったものではない。しかし、その分析の枠組みは、インド全体の経済社会分析においても、有益な視角を提示しているように思われる。ただし、惜しまれるのは、「インドの88パーセント」と扱われなかった残りの12パーセントがどのように異なるのか、また両者はどのような関係にあり、どのように相互に影響を与えながら機能しているのかについては十分に明らかにされていないことである。例えば、著者がフィールド調査を行ったタミル・ナードゥ州は、小都市・農村部に縫製品や皮革・皮革製品の輸出企業の集積地が存在し、国内大都市、世界市場との関係とも無縁ではないと思われる。

第2に、フィールド調査に基づく地域研究の可能性をあますところなく示したことであろう。著者は、経済学ではほとんど分析されることのなかった分野、例えば宗教と経済学、カーストと経済学にまで間口を広げ、それらが日常生活では誰の目にも明らかなのに研究されてこなかったのはなぜか、そして両者はどのような関係にあるのかを絶えず自問自答しながらの議論を展開している。著者自身もまだ完全に納得のいく答えにたどりついていないかもしれない。しかし、フィールド調査ではインドがどのように機能しているかを理論化・体系化することを重んじ、ディシプリンに執着せずにインドの農村や小都市のありふれた日常生活のありのままを観察している。そしてその複雑な現実を分析するために、ジェンダーや地方公務員といったさまざまな変数を捨象していない。もちろん、著者の調査対象地域は広大で多様なインドのほんの一部であることは否定できない。今後、著者が自ら指摘するようにインド国内の地域ごとの社会的蓄積構造の特徴を抽出する必要があるだろう。それは必ずしもフィールド・ワークを

基盤とする必要もないかもしれない。しかし、著者はフィールド調査でしか示せない多くの具体例を効果的に教示し、草の根レベルから見た経済自由化の問題点を説得的に指摘している。単にデータではなくフィールド調査により実証することの重みが繰り返し伝わってくる、インド研究者のみならず地域研究者にとって示唆に富む書であるのは間違いない。

文献リスト

<日本語文献>

- 佐藤宏・金子勝 1998a. 「自由化の政治経済学（ ）
インド国民会議派政権期（1980～96年）における
政治と経済」『アジア経済』39（3）（3月）2-
30 .
・ 1998b. 「自由化の政治経済学（ ）
インド国民会議派政権期（1980～96年）における
政治と経済」『アジア経済』39（4）（4月）
47-81 .

<英語文献>

- Bardhan, Pranab 1984. *The Political Economy of
Development in India*. New Delhi: Oxford
University Press（邦訳は近藤則夫訳『インドの政
治経済学 発展と停滞のダイナミクス』頸
草書房 2000年）.
Harriss-White, Barbara ed. 2002. *Globalization and
Insecurity: Political, Economic and Physical
Challenge*. Basingstoke: Palgrave.
Harriss-White, Barbara and S. Subramanian eds. 1999.
*Illfare in India: Essays on India's Social Sector
in Honour of S. Guhan*. New Delhi: Sage
Publications.
Harriss-White, Barbara and S. Janakarajan eds. 2004.
*Rural India Facing the 21st Century: Essays on
Long Term Village Change and Recent
Development Policy*. London: Anthem Press.
Rogaly, Ben, Barbara Harriss-White and Sugata Bose
eds. 1999. *Sonar Bangla?: Agricultural Growth
and Agrarian Change in West Bengal and*

Bangladesh. New Delhi: Sage Publications.
Toye, John 1993. *Dilemmas of Development:
Reflections on the Counter-Revolution in*

Development Economics. 2nd ed., Oxford and
Cambridge: Balckwell.

(アジア経済研究所在ブライトン海外派遣員)